様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０９２５

研究課題名（和文）中国朝鮮族の韓国への移住と適応過程からみた「韓民族」言説の多重性

研究課題名（英文）Migrating Korean Chinese and changes of national identities

研究代表者
金　どぅ哲（KIM, Doo-Chul）

岡山大学・環境生命科学研究科・教授

研究者番号：１０２８１９７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：中国朝鮮族が，国籍としては「中国」，民族としては「漢民族」として認識しており，これらの多重アイデンティティは話者と相手との関係によってその強弱を変えられる。現在、中国朝鮮族の韓国への移住の歴史も20年を超えており，中国朝鮮族コミュにティの中でも階層分化が生じている。
一方、1990年代から始まった中国朝鮮族の出稼ぎにより、中国朝鮮族集住の農村地域では激しい過疎化が進行している。その結果、不足する農業労働力は地域外から出稼ぎにきた漢族によって担われており、その結果水田から畑への転作が進行している。

研究成果の概要（英文）：A majority of Korean Chinese identify themselves as "Korean" nation with "Chinese" citizenship. These multi identities varies according to the relation with others.
International labor migration of Korean Chinese to South Korea have experienced more than a couple of decades. At present, social segregation of Korean Chinese communities has been observed in South Korea.
Due to international labor migration of Korean Chinese since 1990s, most of Korean Chinese' villages in rural areas have experienced severe depopulation. As a result, Han Chinese have replaced the agricultural labors of Korean Chinese in those villages and they have converted paddy fields to dry fields.

研究分野：人文学

キーワード：中国朝鮮族　国際人口移動　多文化　民族　農村社会

１．研究開始当初の背景

在仏日本人社会心理学者である小坂井(2002)は，“そもそも生物学的に見ても根拠が無い「民族」は社会が作った概念であり「人種」と同じく「民族」は客観的な根拠のないカテゴリーであり，他民族と区別するための虚構に支えられた現象である。・・・「民族」は歴史的に社会が構成してきた当該集団の構成員及び外部の人間によって次第に生み出されてきた主観的範疇に過ぎない”とし，“民族同一性は社会的・心理的なしくみによって生み出されるからくりであり，多文化主義は「民族」を実体的本質的に捉えているという点で，根本的に民族主義と変わらない”という。しかし，民族という虚構はそれが必要だから出来たゆえ，社会を維持する力を合わせ持っており，したがってその虚構と現実は相互補完的であると主張する。すなわち，「民族」は虚構的な集団現象ではあるが，社会の必要により創り出された社会的産物であり，したがって，静的・排他的に捉えるのではなく，動的・多重的に把握する必要があろう。とりわけ，「韓民族」のように一定期間，強力な社会的な変化を集団的に経験し，その経験が共有の言葉で語られる集団の場合は，その民族的一体感がさらに強化される。他方，ある集団的経験が公の記憶（official memory）になる際は，国家などの権力による意図的な単純化が前提となるが，その受容過程においては他律性だけでなく，自発的な受容も存在する。韓国への移住が一般化される前の中国朝鮮族社会が「韓民族」としての民族同一性を強調していたのも，このような過程で起きた自然な社会現象と言えよう（例えば，黄有福,1996)）。ところが，1992年の中韓の国交樹立以来，韓国人との接触が増え，韓国への出稼ぎが本格化すると，中国朝鮮族は虚構としての「韓民族」と現実としての「韓民族」の不整合性を経験し，これらの個別の日常経験は口述，小説，マスコミなどによって再生産され，民族同一性より集団的異質性を強調する傾向が現れる（例えば，朴玉南,2011；中国朝鮮族研究会,2006）。

では，虚構としての「韓民族」と現実としての「韓民族」の不整合性を経験した中国朝鮮族コミュニティはどのような変容を遂げているだろうか。また，その前提となる中国朝鮮族の韓国への移住過程はいかなるものだろうか。そして，中国朝鮮族集住地域である延辺自治州の農村社会はどのような状況に置かれているのか。これが本研究の主な問題意識である。

２．研究の目的

2000 年代以降，韓国社会では「単一民族」の言説や純血主義意識がほぼなくなり，「多文化」がその場を取って代わっている。その背景には，東南アジアからの労働力および結婚移住者と共に，1990 年代以降の中国朝鮮族の移住増加が存在する。彼ら中国朝鮮族が「同胞」という民族概念のもう一つの表現で呼ばれる際に，韓国社会から違和感を感じ取ることはできない。しかし，「韓民族」というより具体的な範疇を示す呼称が用いられた場合は，その反応は様々であろう。

本研究は，一般的に“中国朝鮮族”と呼ばれている彼らは誰なのか？また彼ら自身と韓国社会からどのように認識されているのか？在中“韓国人（朝鮮人）”なのか，それとも“中国”朝鮮族なのか？という素朴でありながら根本的な問題意識から始まる。そこで本研究では，彼らが「中国朝鮮族」となった歴史的な経緯を整理した上，中国朝鮮族の韓国への移住過程について考察する。さらに，中国朝鮮族の出稼ぎによりもたらされた中国朝鮮族集住地域の変容について現地調査の結果に基づいて報告する。加えて，深層インタビューから得た知見から，韓国社会と中国朝鮮族社会における「韓民族」言説の多重性について考察する。

３．研究の方法

本研究ではコリアン・ディアスポラとしての中国朝鮮族の実態と意識を深層インタビューと言論媒体の表象分析・現地での観察を通じて明らかにする。具体的には，ソウルとその周辺の中国朝鮮族集中地区において，中国朝鮮族移住者とホスト・コミュニティ（在韓・韓国人）に対する観察と深層インタビューを行った。また，中国現地の言論媒体の資料を収集し，中国朝鮮族コミュニティの変容について分析した。中国朝鮮族集住地域の変容については主に 2014 年に行った現地調査により明らかにする。

４．研究成果

（１）中国朝鮮族の生い立ち

そもそも中国朝鮮族は19世紀末期以降旧満州国の崩壊まで朝鮮半島から政治的・経済的な理由で旧満州に移住した人々とその子孫というルーツをもちながら，中華人民共和国の成立以降は民族識別工作によって公式に認定された，55の少数民族の一つであり，その移住の歴史は17世紀に遡られる 。

19世紀半ば頃，清朝政府の中国東北地域に対する禁止令が緩和されると，朝鮮半島から土地を求めて越境する農民が急増し，次第に朝鮮族の村が形成された。さらに，1910年の日韓合併後は政治的な理由で満州に渡る人々が加わった。満州への移住初期の朝鮮族の居住地は国境付近の鴨緑江と図們江の北岸地域に集中していたが，次第に黒龍江省や内モンゴルまで拡大され，中国東北部全域まで広がっていった。

（２）中国朝鮮族の韓国への移住

中国の朝鮮族の総数は1990年には約192万人であったが, 2010年には約183万人と減少し, とりわけ人口の6割以上が朝鮮族で占められていた延辺朝鮮族自治州では，朝鮮族人口の比率が4割以下まで下がっている。中国のひとり子政策の対象外である中国朝鮮族の人口減少と比率の低下は専ら韓国などへの出稼ぎによるものであり，そのうち海外への出稼ぎは「労務輸出」として政策的に奨励されてきた。延辺地域の「労務輸出」をみると，韓国の金融危機で倒産が相次いでいた1998年を除けば, 韓国と国交が樹立された1992年から持続的に増加している。すなわち，韓国の金融危機以前の1997年までの中国朝鮮族の韓国行きは一部の「親族訪問」限られ，55歳以上で6親等以内の親族や4親等以内の姻族の招へいがないと実現できなかった。ところが，1999年にはその対象が25歳以上に拡大され，労働人口の非合法的な出稼ぎが急増した。さらに，2002年には韓国におけるサービス業における労働力不足に対応するため，中国朝鮮族の優先的雇用を目的とした「就業管理制」が導入され, サービス業の6分野で中国朝鮮族の優先的就業が可能となった。2003年からは「雇用許可制」が導入され，より外国人労働者政策としての性格を強めた。つまり，韓国の中国朝鮮族の受入は在外同胞政策から始まったが，次第に労働力の供給の性格を強めるにつれて，その規模も拡大していった。

（３）中国朝鮮族集住地域の変容

近年，中国少数民族の一つである朝鮮族の集住農村地域で激しい過疎化が進行している。直接のきっかけは 1990 年代から始まった韓国などへの出稼ぎであるが，その出現時期は中国朝鮮族の移住の歴史と密接に関連している。すなわち，1920 年代以降に主に経済的な理由で朝鮮半島の中南部から移住してきた人々の多い黒竜江省や内モンゴル地域では, 1990 年代半ば頃から本格的な韓国への出稼ぎが始まったが，朝鮮半島の北部から越境してきた人々の子孫が多い吉林省や遼寧省では，韓国で「在外同胞法」が制定され中国朝鮮族の韓国行きが容易になった 2000 年以降に本格的な出稼ぎが始まった。その結

果，約 10 年間のギャップをおきながら，中国朝鮮族の集住地域である東北 3 省の朝鮮族集落は軒並み過疎になってしまった。

そこで，ここでは延辺朝鮮族自治州の州都である延吉市から南へ 20 ㎞ほど離れており，行政区域としては龍井市東盛涌鎮に属する仁化村を事例に近年の中国朝鮮族の国際移動とりわけ韓国への出稼ぎによる農村社会の変化について分析する。

2014 年現在の仁化村の戸籍上の世帯数と人口はそれぞれ約 434 戸の 1,779 人（うち，朝鮮族が約 80%）となっているが，そのほとんどは韓国などへ出稼ぎに出ており，実際の居住人口は約 600 人に過ぎない。近年は出稼ぎに出ていた朝鮮族の農地を耕作するため，「黒戸口」と呼ばれる戸籍なしで暫定的に居住している漢族が 70〜80 人ほど加わっているが，それでも戸籍人口の 3 割程度しか住んでいないことになる。1985 年の仁化村の世帯数と人口がそれぞれ約 430 戸の 1916 人（うち，朝鮮族が 1463 人）　）であったことを考えると，過去 30 年間に人口の 2／3 が村外へ流出したことになり，日本や韓国の農村部で経験してきた人口減少よりもはるかに激しい人口変動があったことが窺える。

仁化村には住民のほとんどが朝鮮族であるが，地付の漢族も若干含まれている。ところが，近年地付の漢族とは全く縁のない漢族の流入が増えている。彼らのことを現地では戸籍なしで居候している者という意味で「黒戸口」と呼ばれているが，実際に仁化村の農業を担っているのはこの「黒戸口」なのである。仁化村に「黒戸口」が現れ始めたのは，地元朝鮮族の韓国への出稼ぎが本格化した 2000 年以降であり，彼らの出身地はほとんどが九台，松原などの吉林省や黒竜江省である。当時の仁化村の小作料は松原市や九台の数分の一に過ぎず，韓国等へ出稼ぎに行っている朝鮮族の農地を簡単に借りることができた。また，農業機械の普及や農業技術の進歩により，経験のない漢族でも水田の耕作ができるようになったことも重要な要因である。現在の仁化村の小作料は水田が 1 ムあたり 400〜500 元，畑（旱田）は 1 ムあたり 300〜400 元であり，九台などのほかの吉林省地域より安いという。「黒戸口」の小作契約はほとんどが口頭によるものであり，いつでも廃棄されうるもので，土地使用権の期限である 2024 年まで権利が保障されている「長期農地賃貸契約」はごく一部に過ぎない。住まいに関しては出稼ぎに出ている朝鮮族の空き家を購入するケースがほとんどで，一部は無償・有償で空き家を借りて生活している。彼らは仁化村に戸籍がないため，農地を購入することができず，すべて小作契約によって農地を確保している。「黒戸口」は大型農業機械を多数保有し，農地を集約化し大規模農業経営によって収益を実現しようとするため，耕作面積が朝鮮族に比べて桁違いに多い 10〜30ha 耕作するのが一般的である。自力で大型農業機械を購入するケースは稀で，ほとんどは地元の朝鮮族の名義を借りて融資を受けて購入するという。

近年，仁化村で農業に従事する朝鮮族は 20 人以下であり，農地のほとんどは「黒戸口」が耕作している。しかし，最近は「黒戸口」の農地管理が粗放的で，農地が荒れることが多いという理由で「黒戸口」への小作を嫌い，小作料が若干安くても朝鮮族や地付の漢族に農地を貸す朝鮮族もいるという　）。「黒戸口」は水田より畑での商品作物の栽培を好み，特に水条件の悪い水田を中心に畑に変えてしまうことが少なからずあるという。

（4）中国朝鮮族の「韓民族」言説の多重性

ソウル市のガリボン洞，デリム洞，およびソウル近郊のオゥンゴック洞といった中国朝鮮族集住地区における深層インタビューによると，インタビューに応じたほとんどの中国朝鮮族が，国籍としては「中国」，民族

としては「漢民族」として認識しており，これらの多重アイデンティティは話者と相手との関係によってその強弱を変えられることが確認された。また，韓国に在住している中国朝鮮族の中には，滞在の身分によって大きく長期滞在型と出稼ぎ型に分けられることが分かった。すなわち，主に 1930 年代以降に朝鮮半島に中南部から満州に移住した祖先をもつ者は祖先の戸籍や親戚の人的保証などを頼りに韓国籍へ変えるケースが多く，彼らは依然として「朝鮮族」としてのアイデンティティを保ちながらも韓国での永住もしくは長期滞在を希望していた。他方，満州への移住時期が早く祖先の出身地が北朝鮮である者は 5 年間のマルチビザで滞在しているケースが多く，不安定な身分のため老年期には中国での生活を考えている傾向があった。さらに，注目すべきはこれらの 2 類型は中国での出身地とも対応していることである。すなわち，前者は黒竜江省や内モンゴル自治州の出身に多く見られる反面，後者は延辺自治州をはじめ吉林省や遼寧省出身者に多いが，このことは 18 世紀末以降の朝鮮半島から満州への移民の歴史とも深い関連があることも明らかとなった。

さらに，中国朝鮮族集住地区においても社会的な隔離が進行しており，移民者集中地域でよく見られる地域住民の二重的な態度が確認されたことも興味深い。地域住民のネガティブな評価は中国朝鮮族集住地区の中心から離れるにつれ，薄れていく傾向があり，日常的な相互作用の頻度と強度に反比例することが確認された。中国朝鮮族の韓国への移住の歴史も 20 年を超えており，中国朝鮮族コミュにティの中でも階層分化が生じていることは特筆に値する。

参考文献

小坂井敏晶（2002）：民族という虚構．東京大学出版社.
黄有福（1996）：中国朝鮮族社会と文化の研究．民族出版社.
朴玉南（2011）：短編小説集「長孫」．延辺人民出版社.
中国朝鮮族研究会（2006）：朝鮮族のグローバルな国際移動と国際ネットワーク．アジア経済文化研究所.

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　1　件）
金 どぅ哲，中国朝鮮族の韓国への移住と適応過程，ディアスポラ研究会，2104.6.5，韓国学中央研究院.

〔図書〕（計　1　件）
Doo-Chul Kim, Ana Maria Firmino, Yasuo Ichikawa (eds.), *Globalization and New Challenges of Agricultural and Rural Systems*, IGU Commission on the Sustainability of Rural Systems and Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, 2015, 182p.

６．研究組織
(1)研究代表者
金　どぅ哲（KIM, DOO-CHUL）
岡山大学・大学院環境生命科学研究科・教授
研究者番号：10281974